

1. 主はモーセとアロンに告げて仰せられた。
2. 「レビ人のうち、ケハテ族の人口調査を、その氏族ごとに、父祖の家ごとにせよ。
3. それは会見の天幕で務めにつき、仕事をすることのできる三十歳以上五十歳までのすべての者である。
4. ケハテ族の会見の天幕での奉仕は、最も聖なるものにかかわることであって次のとおりである。
5. 宿営が進むときは、アロンとその子らははいて行って、仕切りの幕を取り降ろし、あかしの箱をそれでおおい、
6. その上にじゅごんの皮のおおいを掛け、またその上に真青の布を延べ、かつぎ棒を通す。
7. また、供えのパンの机の上に青色の布を延べ、  
その上に皿、ひしゃく、水差し、注ぎのささげ物のためのびんを載せ、またその上に常供のパンを置かなければならない。
8. これらのものの上に緋色の燃り糸の布を延べ、じゅごんの皮のおおいでこれをおおい、かつぎ棒を通す。
9. 青色の布を取って、燭台とともしび皿、心切りばさみ、心取り皿およびそれに用いるすべての油のための器具をおおい、
10. この燭台とそのすべての器具をじゅごんの皮のおおいの中に入れ、これをかつぎ台に載せる。
11. また金の祭壇の上に青色の布を延べなければならぬ。  
それをじゅごんの皮のおおいでおおい、かつぎ棒を通す。
12. 聖所で務めに用いる用具をみな取り、青色の布の中に入れ、  
じゅごんの皮のおおいでそれをおおい、これをかつぎ台に載せ、
13. 祭壇から灰を除き、紫色の布をその上に延べる。
14. その上に、祭壇で用いるすべての用器、すなわち火皿、肉刺し、十能、鉢、  
これら祭壇のすべての用具を載せ、じゅごんの皮のおおいをその上に延べ、かつぎ棒を通す。
15. 宿営が進むときは、  
アロンとその子らが聖なるものと聖所のすべての器具をおおい終わって、  
その後ケハテ族がはいて来て、これらを運ばなければならぬ。  
彼らが聖なるものに触れて死なないためである。  
これらは会見の天幕で、ケハテ族のになうものである。
16. 祭司アロンの子エルアザルの責任は、ともしび用の油、かおりの高い香、常供の穀物のささげ物、  
そそぎの油についてであり、幕屋全体とその中にあるすべての聖なるものと、その用具についての責任である。」
17. ついで主はモーセとアロンに告げて仰せられた。
18. 「あなたがたは、ケハテ人諸氏族の部族をレビ人のうちから絶えさせてはならない。
19. あなたがたは、彼らに次のようにし、彼らが最も聖なるものに近づくときにも、死なずに生きているようにせよ。  
アロンとその子らが、はいて行き、彼らにおおのの奉仕と、そのになうものとを指定しなければならない。
20. 彼らのはいて行って、一目でも聖なるものを見て死なないためである。」
21. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
22. 「あなたはまた、ゲルシオン族の人口調査を、その父祖の家ごとに、その氏族ごとに行ない、
23. 三十歳以上五十歳までの者で会見の天幕で務めを果たし、奉仕することのできる者をすべて登録しなければならない。
24. ゲルシオン人諸氏族のなすべき奉仕とそのになうものに関しては次のとおりである。
25. すなわち幕屋の幕、会見の天幕とそのおおい、その上に掛けるじゅごんの皮のおおい、会見の天幕の入口の垂れ幕を運び、
26. また庭の掛け幕、幕屋と祭壇の回りを取り巻く庭の門の入口の垂れ幕、  
それらのひも、およびそれらに用いるすべての用具を運び、これらに係するすべての奉仕をしなければならない。
27. 彼らのになうものと奉仕にかかわるゲルシオン族のすべての奉仕は、アロンとその子らの命令によらなければならない。

- あなたがたは、彼らに、任務として、彼らになうものをすべて割り当てなければならない。
- 28 . 以上がゲルシオン諸氏族の会見の天幕においての奉仕であって、  
彼らの任務は祭司アロンの子イタマルの監督のもとにある。
- 29 . メラリ族について、あなたはその氏族ごとに、父祖の家ごとに、彼らを登録しなければならない。
- 30 . 三十歳以上五十歳までの者で、  
務めにつき、会見の天幕の奉仕をすることのできる者たちすべてを登録しなければならない。
- 31 . 会見の天幕での彼らのすべての奉仕で、彼らになう任務のあるものは次のとおりである。  
幕屋の板、その横木、その柱とその台座、
- 32 . 庭の回りの柱と、その台座、釘、ひも、これらの用具と、その奉仕に使うすべての物である。  
あなたがたは彼らになう任務のある用具を名ざして割り当てなければならない。
- 33 . これが会見の天幕でのすべての奉仕に関するメラリ諸氏族の奉仕であって、  
これは祭司アロンの子イタマルの監督のもとにある。」
- 34 . そこでモーセとアロンと会衆の上に立つ者たちは、ケハテ族をその氏族ごとに、父祖の家ごとに、
- 35 . 三十歳以上五十歳までの者で、会見の天幕での奉仕の務めにつくことのできる者を、すべて登録した。
- 36 . その氏族ごとに登録された者は、二千七百五十人であった。
- 37 . これはケハテ人諸氏族で登録された者であって、  
会見の天幕で奉仕する者の全員であり、  
モーセとアロンが、モーセを通して示された主の命令によって登録した者たちである。
- 38 . ゲルシオン族で、その氏族ごとに、父祖の家ごとに登録され、
- 39 . 三十歳以上五十歳までの者で、会見の天幕での奉仕の務めにつくことのできる者の全員、
- 40 . その氏族ごとに、父祖の家ごとに登録された者は、二千六百三十人であった。
- 41 . これはゲルシオン諸氏族で登録された者であって、  
会見の天幕で奉仕する者の全員であり、モーセとアロンが主の命により登録した者たちである。
- 42 . メラリ諸氏族で、その氏族ごとに、父祖の家ごとに登録され、
- 43 . 三十歳以上五十歳までの者で、会見の天幕での奉仕の務めにつくことのできる者の全員、
- 44 . その氏族ごとに登録された者は、三千二百人であった。
- 45 . これはメラリ諸氏族で登録された者であって、  
モーセとアロンが、モーセを通して示された主の命令によって登録した者たちである。
- 46 . モーセとアロンとイスラエルの族長たちが、  
レビ人を、その氏族ごとに、父祖の家ごとに登録した登録者の全員、
- 47 . 三十歳以上五十歳までの者で会見の天幕で、働く奉仕と、になう奉仕をする者全員、
- 48 . その登録された者は、八千五百八十人であった。
- 49 . モーセを通して示された主の命令によって、彼は、おのおのその奉仕とそのになうものについて、彼らを登録した。  
主がモーセに命じたとおりに登録された者たちである。

## 説教

民数記4章は、レビ人の務めについての神さまの教えです。神さまに直接仕えるのは大祭司であるアロンと祭司であるその子孫たちですが、彼らを補助する者たちがレビ人です。レビ人は12部族のうちモーセとアロンの属する部族でし

た。聖書の他の箇所では単に「レビ人」と一括して記されているのですが、民数記4章には、その「レビ人」の中にも三つの氏族があり、それぞれ働きの重要さや役割が異なっていたことが記録されていて、興味深く貴重です。つまり祭司を補佐するレビ人の働きにもおもに三種類があり、それぞれが互いの領域を侵犯することなく、自分の務めをしっかりと果たすことが求められておりました。その三つの氏族とはケハテ族とゲルシオン族とメラリ族でした。

まず、三氏族ともそれぞれ「仕事をするのできる」年齢が「三十歳以上五十歳まで」であることが教えられます(3,23,30)。「仕事 ab'c'」は「軍務」(1:3)とも訳されます。レビ人以外のすべての男子が兵役につくのに対し、レビ人はすべて兵役ではなく幕屋での奉仕を通して神とイスラエルに貢献するのです。「軍務」の場合には20歳以上が徴兵され(1:3)、何歳まで兵役に就くかは規定されていないのですが、レビ人の奉仕は「三十歳以上五十歳まで」とはっきり規定されています。他の青年が軍務に就く20歳から30歳までブラブラしていたわけではないと思います。おそらく20歳から30歳まではいわば見習いの修行の時で、その後30歳から50歳までという最も働き盛りで気力も体力も充実した最高の時期を神さまに献げて奉仕するようと言うのです。勿論、働き盛りの時期にも個人差はあると思いますが、神さまのために奉仕する者は誰でもよいというわけではなく、イスラエル最善の人物を選んでその務めに就かせるようにというのがここでの神さまの命令です。

三氏族のうち、まずケハテ族は「最も聖なるものに関わる」奉仕を担当します(4:4)。彼らは「あかしの箱(契約の箱のこと)」、「燭台」、「金の祭壇(至聖所の前にある香炉のこと)」など、至聖所と聖所にあった器具類を運びました。このうち「あかしの箱」は幕屋の中でも最も重要な物なので、まず聖所と至聖所を隔てる「仕切りの幕」で覆い、それから「じゅごんの皮」で覆った後に、最後は「真青の布」で包んで、担げるよう「かつぎ棒」を通しました。「青」は神さまの住んでおられる天の色で(出エジプト24:10)、神さまの臨在をあらわす色として至聖所の幕に使われました。他の幕屋の用具は、最初に「真青の布」で覆った後にその上を「じゅごんの皮」で覆い(民数記4:7-12)、幕屋の外庭にある「祭壇」は、「紫色の布」で覆ってから「じゅごんの皮」で覆います(13-14)。つまり幕屋の他の器具がすべて最後は「じゅごんの皮」で覆われているのに対し、「あかしの箱」だけは「真青の布」で外側を覆われて特に目立つのです。至聖所にあった時には「仕切りの幕」に遮られて誰にも見ることの許されていなかった「あかしの箱」は、運ぶ時にもやはり「仕切りの幕」に覆われて見ることを許されないのみならず、最も外側を「真青の布」で覆われて、神さまがイスラエルと共におられることを鮮やかに表していました。

続いて登場するゲルシオン族は、「幕屋の幕」、「会見の天幕とそのおおい」、「庭の掛け幕」などを運びます。最後のメラリ族は「幕屋の板」、「横木」、「その柱と台座」、「庭の回りの柱」、「台座、釘、ひも」などを荷台に載せて運びます。

以上ふたつの氏族と比較しても、最初のケハテ族の地位と役割は三氏族の中で傑出していることがわかります。ケハテ族はモーセとアロンの出身氏族でもあり、幕屋の中でも最も重要な至聖所と聖所の器具を担当したのです。ただしそのケハテ族でさえ、5節と15節をよく読むと、実は、彼らの任務は単に器具を運ぶだけであり、荷造りをするのは彼らではなく「アロンとその子ら」であることがわかります。5節では「アロンとその子らはいって行って、仕切りの幕を取り降ろし…」とあります。15節前半では「宿営が進むときは、アロンとその子らが聖なるものと聖所のすべての器具をおおい終わって、その後にケハテ族がはいって来て、これらを運ばなければならない。」とあります。つまり祭司であ

る「アロンとその子ら」が聖所と至聖所の器具を荷造りしてから、レビ人のケハテ族がそれを運ぶのです。

このことは、三氏族の中でどんなに傑出した地位にあっても、レビ人はあくまでレビ人であり、祭司にはなり得ないということの意味します。聖所と至聖所に入入りしてその器具を扱うのは、あくまで神さまの御用のために特別に聖別された祭司の務めです。レビ人は単にその助けをするに過ぎません。それで先の 15 節の後半には「彼ら（ケハテ族）が聖なるものに触れて死なないためである」と言われます。18-20 節でも「あなたがたは、ケハテ人諸氏族の部族をレビ人のうちから絶えさせてはならない。…彼ら（ケハテ族）が最も聖なるものに近づく時にも、死なないようにせよ。…彼らがいって行って、一目でも聖なるものを見て死なないためである」と言われます。大祭司アロンの子であっても、高慢になって神さまに背けば、神さまに打たれて殺されます（レビ記 10:1-3、民数記 3:4）。三氏族中で最上位のケハテ族が自分の地位に飽き足らず、自分の分を越えて祭司の地位まで要求するなら、神さまの言われる通り、神さまに打たれて死ぬことになります。

そして後にこのことが実際に起こりました。ケハテ族のコラが「分を越えて」「祭司の職まで要求」し、モーセとアロンに反逆するのです。そして神さまの怒りにより、すべての所有物と共に一族もろとも、生きたまま地に飲み込まれて滅ぼされてしまいます（民数記16:31-33）。最も神さまに近い所で奉仕する者は、より恵まれた自分の特権と地位を誇ったり、高慢になってはなりません。神さまに近いということは、それだけ恵みと特権と栄光も大きいけれども、さばきも大きいのです。いのちに満ちているけれども、死にも近いです。「死なないようにせよ」という神さまの命令は、ケハテ族だけに言われていることです。他の二つの氏族には言われていません。最も大きな特権を与えられたケハテ族にだけ、神さまが命令しておられることです。それだけ高慢になりやすいし、事実そうやって神さまに打たれました。

神さまに近い所で奉仕している（つまり、偉い）ということは、この場合、契約の箱により近いということです。そして契約の箱は、人の罪を贖って、人が神と交流することを可能にしました。その契約の箱に近ければ、それだけ神さまの恵みを間近に見ることができます。自分の手でいけにえを屠り、こうやって人の罪が贖われるという現場を目の当たりにして、自分の罪が身代わりのいけにえによって贖われた事実を生々しく知って、よりたくさん神の栄光を見ます。つまりそういう意味で神さまに近いのです。神さまの恵みを間近に見て、手で触れて、実際に体験する、そういう意味で祭司は最も恵まれた地位にありました。そしてそれを補助するレビ人たちも、一般の人たちよりはより恵まれた地位にあったとすることができます。大祭司、祭司、そしてレビ人、レビ人の中でもケハテ族、ゲルシオン族、そしてメラリ族の順で恵まれた地位にありました。

これが聖書的な偉さです。それは自分が神に近いとか、レベルの高い偉い人間だというような世的な偉さではありません。言い換えると、それは神さまの憐れみをそれだけより多く体験して知っている、という偉さです。より多く恵まれて、より多く神と人を愛し、神の働きをして神の栄光をあらわす、という偉さです。それは憐れみの大きさです。それをわかっていれば、絶対に高慢になれないはずで、むしろ知れば知るほど、謙虚にさせられます。私たちは高慢になって神さまに打たれることなく、どんな立場にあり、どんな奉仕で於いても、神さまの贖いの恵みによって良く奉仕することができたことに感謝して、謙虚に、自分に与えられたつとめに喜んで励んでいきたいと心から願います。